

五. その他

新愛知新聞・南正義記者の証言

南正義氏にお会いしたのは、昭和六十二年六月四日である。

南氏は、名古屋にある東海ラジオの社長をつとめていた。多忙な職務のため、果たしてお目にかかれるのかどうか、申込みを躊躇していたが、思い切って申込んでみると簡単に了承して下さった。

間もなく南氏が現れた。現れた南氏は六十歳過ぎにしが見えない。五十年前に従軍してゐるから少なくとも七十歳を過ぎてゐるはずである。このインタビューを行なつていて、多くの人に会つた。まだ勤めている人もいたが、本当の意味の現役は南氏だけである。また、若く見える人もたくさんいたが、やはり現役で働いている人は輝いている。

お目にかつた南氏はきさくな人で、それまで三度手紙を差し上げていて、南京城攻撃の頃の話を開きたいということは十分ご存知だったので、積極的に話して下さった。

南氏は明治四十五年四月三重県伊勢市に生まれた。新愛知新聞（現在の中日新聞）に入つて社会部の記者をつとめてゐるとき支那事変が起きた。事変勃発と共に、新愛知新聞も何人かの記者を派遣したが、十二月に入り南京陥落が近いといふので、改めて四人の記者、

カメラマンを送つた。その一人が南氏である。

その頃、国民新聞は経営上の問題から新愛知新聞の系列に入つた。そのため、南氏は新愛知新聞だけでなく、国民新聞の記者も兼ねてゐた。二十五歳であつた。

——南京にはどの方向から行きましたか。

「中山門から入りました。先頭の兵隊と一緒に進み、暗いうちに中山門まで行きました。そこから先には進めず、中山門上で城内の様子をうかがいながら待機してゐました。

十二月十三日ですか、先頭の部隊と共に中山門から城内に入り、中山東路を進むと、街路樹のプラタナスに日本兵が吊るされていて大騒ぎになりました」

——日本兵がですか。

「そうですね。後でわかつたのですが、通済門か光華門で戦いがあり、そこで捕まつた日本兵らしいのです。それを中山東路につれてきて、殺して、プラタナスの木に吊るしたものです。下から火であぶつてありました」

——何体くらいですか。

「私が見たのは二、三体です。すぐプラタナスから下ろしました。

それを見た兵隊たちはカーツとなりましてね。それでなくとも敵愾心がありますから」
——はじめて聞く話ですが。

「一番最初に入った兵隊しか知りませんからそうでしょう。すぐに日本兵を下ろしました

しね。南京城内で私はこのことが一番印象に残っていたので、戦後、南京に行った時、そのプラタナスの所に行ってみました。四十数年たっていました。プラタナスはそのままありました。当時はこんなもの（両手の人差し指と親指で輪を作る）でしたが、そのときはひとかかえもある（両腕で輪を作る）ほど伸びていました。ああ、これがあのプラタナスだったなと思いました。

日本兵を下ろした後は戦闘中ですからすぐ城内の中心に向けて進みました」

——城内で虐殺があったと言われていますが。

「そういうことはありません。虐殺があったなど誰も言っていないし、見ていない。日本が戦争で負けてから中国がでつちあげて言い出したことです」

——城内で虐殺らしきことは見ていませんか。

「見てません。すべて戦闘です。一部の兵隊がカーツとなっていることはありますが戦闘です。

日本兵は食糧はない、中国兵も統制がとれないということがあり、戦闘というものは規則どおり行なわれるものじゃありませんがね。夫子廟のあたりで各部隊を止めて、市民のいるところには行けませんでしたし」

——捕虜をやったと言われていますが。

「その時『決戦に捕虜なし』という言葉があつて、捕虜という考えは日本軍にはなかったと思います。もちろん中国だつて、逃げる時は家を焼き払い、物を壊して逃げ、便衣隊に

なつてスパイをやるし、捕虜になつて助かるという気はありません。

お互い捕虜という概念がなく、助かろうという気もないから、捕虜をやつたというのも変な話です。それは、あとからこういう国際法に照らし合わせればということだね。戦場を知らない人がそれを虐殺だと言っているだけです。

便衣隊のことを虐殺だと言つてる人もいますが、それは虐殺ではありません」

——同じジャーナリズムでも朝日新聞は南京虐殺だと言っていますか。

「ああ、朝日新聞ね。朝日新聞はモスクワでも発行すればよい」

——南京ではどこにいましたか。

「後で名古屋の第三師団が南京に来ましたからそちらに行つてます。私は通信のため南京と上海を何度も往復して、年が明けてからも南京に行つてます。ともに上海に行つたカメラマンの川井克巳と一緒にすることが多く、従軍記者の中には、松井大将の親戚にあたる松井敏もいました」

——さきほど、戦後南京に行つたとおっしゃっていますが、いつのことですか。

「私は従軍記者をやつていて、日本が勝つた記事を書いていたから、中国に行つても嫌われるだろうし、行く気もなかった。中国に負けてくやしいとも思っていましたからね。名古屋市が南京市と姉妹都市になつて日中友好をやるうということになつた時そんな気でいました。

ところが私も東海ラジオでこういう立場だから南京と友好をやらないわけにはいかない。

東海ラジオでも友好のための何かをやるうということになったとき、私が率先して南京に行きました。

南京に東海ラジオの番組を持って行って流すと、音楽など中国人は喜ぶんだな。そこでうちの番組を南京で流すことにした。また、揚子江に長江大橋という立派な橋がある。何キロもあるやつだね。この橋を使って日中友好ジョギングをしようという案を出して、ジョギング大会を始めた。今年は三回目で、十一月三日にやる予定です。私も去年Tシャツを着て南京市長と一緒に走ったよ」

——南京に行って中国側から虐殺のことを言われませんか。

「一度もない」

——南京に虐殺記念館ができてますが。

「ほう、そうか。私は中山門とか、中山通とか、思い出の場所には行ったが虐殺記念館は知らない」

——江東門外にあるということですが。

「そこには行ったことがない。南京市長も何も言わない。そもそも南京事件ということ南京では誰も言わないよ。中国では当然私の前歴など調べて、どんな人間か知っているはずだ。まあ、今、お互いうまくいっているから何も言わないだろう。」

しかし南京事件といってもありもしないことだから、もし相手が言うようだったら私も言うよ。南京市長より私が当時の南京をよく知っているからね。

逆に、今、私が先頭で友好をやっているから、南京事件がなかったと言うと問題がある。影響があるからね。私は昔のメモなどもっているの、今の仕事をやめたら本当のことを書きたいと思っているんだ」

以上が南氏の主な話である。

新愛知新聞はその後名古屋新聞と合併して中部日本新聞になった。昭和二十八年、南氏は中部日本新聞から移って東海ラジオをつくりあげた。現在、東海ラジオ社長のほか、東海テレビの代表取締役などさまざまな役職を兼ねている。

この南氏のお話は、昭和六十二年にうかがったものであるけれど、その際、さしあたり公表は見合わせてほしいという要望があり、『聞き書 南京事件』に掲載はできなかった。将来は公表しても構わないとおっしゃっていたので、今回の文庫本化にあたり、当時まとめたままを掲載することにした。

福岡日々新聞・三苦幹之介記者の証言

三苦幹之介氏は明治三十五年、福岡に生れ、東京帝国大学を卒業後、地元の福岡日々新聞社（現在の西日本新聞社）に入社した。昭和十二年当時は、社会部編集記者であった。

福岡日々新聞社は、蘆溝橋事件勃発と共に北支に記者、カメラマンを派遣し、戦火が中支に飛び火すると中支にも派遣し、この年だけで十五人の記者・カメラマンを中国に派遣

している。これは地方新聞社の中では最大であった。当時の福岡日々新聞を見ると、自社の記者による特報が大々的に載り、他の地方新聞には見られない紙面構成である。

中支では、上海派遣軍を助けるため杭州湾上陸作戦が立案され、昭和十二年十月、第十軍が編成された。そして、第十軍の隷下師団として、久留米で特設第十八師団が編成された。地元の新聞社である福岡日々新聞社では、そのため三吾氏を従軍記者として特派することになった。当時、三吾氏は三十四歳である。

昭和十二年十月五日、第十八師団は久留米を出発、門司港から乗船、約一カ月間、長崎県の五島列島で訓練・待機ののち、十一月五日、杭州湾敵前上陸戦に参加、部隊は鏡塘江口に近い金山衛城付近一帯に上陸した。

——上陸のときは第十八師団と一緒だったのですか。

「そうです。うす暗い朝もやをつけて鏡塘江下流の渕水の遠浅を、胸のあたりまで塩水につかり、部隊と共にあがりました。重たいリュックを背負い、カメラを構えて、できる限り撮りまくったのですが、ずぶ濡れになってしまつて、ボケ写真一、二枚がやっと使用にたえた、という有様でした」

——第十八師団は南京攻略に参加したのですか。

「特設第十八師団の任務は、攻略戦に際しては南京城内方面から脱出してくる敵の退路を遮断し、殲滅することでありました。そのため湖州が陥落してから、南京を遠巻に太湖か

ら揚子江にいたる南西方面に布陣して待機していました。

南京では中華門攻撃が開始され、大激戦の様子でしたが、陥落はもう時間の問題とされていきました。陥落したら入城式が行なわれます。師団司令部は、入城式に部隊を代表して参列するように命令を受けていました。そのため司令部は前もって、南京城西側の水西門から入城して、その日をつつことになっていました」

——そうすると、三吾さんは師団司令部と共に入城されたのですか。

「いいえ。私は南京攻略の華々しい現場がどうしても見たいので、またしても部隊から離れて彷徨していると、ふと揚子江のほとりに出ました。そこは太平(当塗)という所でした。港町の様でした。やがてどこかの部隊の鉄舟が上流から下つてきて着岸しました。聞けば南京に行くのだという。そこでこれ幸いと頼みこんで便乗しました」

——揚子江を下られたのですか。

「揚子江を下る途中、川の中の一つの島にどうやら部隊がいるようでしたから、艇を着けてもらいました。地図を按ずると、左岸ちかくに烏江という地名がのっています。楚の項羽の故事で名高いあの土地です。

川中島には右翼の有名な橋本欣五郎大佐(野戦重砲兵第十三連隊長)が陣地を構築していました。「上からの命令があったので、今しがた英艦をやつつけてやった」と、昂然たる態度でした」

——それから南京に入られたのですか。

「鉄舟で揚子江を下り、南京の表玄関である下関^{シヤカウ}の埠頭に上陸しました。日にちは、はっきりしませんが、たぶん、十二月十三日の午後ではなかったかと思えます。日本軍が中華門近くに突入したのが十二月十二日。十三日午前中まで城内外で掃蕩戦が続いたといえますから、私が入城したのは十二月十三日の午後だったと思えます。戦闘はもうすつかり終っていました。」

下関に上陸しますと、日本軍のトラックが動いていました。空車だったので、何処へ行くのかと訊ねますと、南京城内を通り抜けて、西側の水西門まで行くと言います。そこで乗せてもらい、水西門に着いた頃はもう夕暮で、あたりは暗くなっております」

——水西門に着いて、どうされましたか。

「水西門を出たところに、鹿兒島の小原部隊がいました。大隊副官の話によると、その日の午前中まで敵味方入り交り、血しぶきを浴びて闘ったということでした。」

そこで小原(重孝少佐)部隊長に会いました。小原部隊長は、海外武官の経歴があり、そこぶる礼儀のうるさい人の様に見受けました。ガランとした部屋で、私と二人話している時に、ある新聞社のガサツな記者がノックをしないのでつそり入ってきました。カッと頭に来た部隊長は、『貴様は何者か、出て行け』と大声で怒鳴りました。そして副官が飛びこんでくると、『外部の者を入れてはならぬ』と命令を下しました。私たちは部屋を出ましたが、副官は気の毒に思っ、その夜は建物の一隅に、そつと部屋を当てがってくれました。

翌日、暗い中に起きて道路に出ました。道路のわきを見てごらんさいと言われていたので、気をつけてよく見ると、朝露の中に、藍衣の支那兵の死体がゴロゴロ転っていました。数が多いので驚き、念のため、何名ぐらいであろうかと数えてみると、概算五、六百でした」

——第十八師団司令部の宿舎は見つかりましたか。

「城内はガランと静かで、住民の姿は一人も見かけませんでした。たまに人がいると、それは日本の兵隊が城内を見て歩いているのでした。兵隊をつかまえて、片っ端から尋ね歩いていると、案外容易に見つかりました。師団司令部は中華路の宝慶銀楼という空屋を宿舎にあてていました。」

牛島(貞雄中将)師団長は、私が軍と共に泥んこの悪路を何日も強行軍し、また原稿発送のため戦地と上海間を駆け廻っていたことをよく承知していたので、『君もずいぶん苦労したね』と言って、すでに書いておいた一枚の墨書をくれました。昔、戦場で武将が部下に与えた感状のような意味あいのものだなと思えました。牛島師団長はまた、私のために取って置かせた恩賜の酒一本と煙草一箱をくれました。親父のような温か味の感じられる人柄でした」

——陥落後の南京城内の有様はどんなでしたか。

「さぞ荒廃しているだろうと思っていました、あまり荒れていませんので、意外に思いました。激戦のあった中華門など城門のあった所は被害が大きかっただろうと思いますが、

そこまでは遠くて見に行けませんでした。市街も道路もきれいになってました。入城式をひかえて、清掃されたことも事実でしょう。中山東路の軍官学校や、入城式のある中山門の下見にも行ってみました。どこもきれいに片づいて、放置された死体などありませんでした」

——南京では大虐殺が行なわれたと言われていますが……。

「私は陥落直後の南京を見ておりますから、自信を持って言えることですが、大虐殺の話なんか見ても聞いてもおりません。痕跡すら何一つありませんでした。もつとも、私は入城式がすむとすぐ上海に特派員交替をして、年内に日本に帰ってきましたので、その後のことは存じません。しかし、南京が陥落した後にはそんな虐殺行為を行なうはずはありません。南京の住民は、早くから難民区に収容されて保護を受けており、支那兵は南京守備隊を残して大部隊は撤退したものと私は考えます。南京城内に大部隊の兵隊が集結していたら、日本軍が包囲態勢で攻めてきているので全滅するしかありません。中国は広い。深傷を負わないうちに部隊はいち早く奥地・漢口へ退きました。当然なことでしょう。まださきに重慶もあります。日本軍の戦線を糸の様に弱く引き伸ばすのが敵の作戦でしょう。

昭和十四年の春になり、私は南京支局長を命ぜられて、再び南京に行きました。支局長は中山北路にあり、それから南京に足かけ六年いて、現地召集で応召し、漢口で入隊、長沙方面に向いました。終戦になり、召集解除後、南京居留民の一万人と一緒に南京城外の旧日本軍兵舎に収容生活を送り、半年ばかりして引揚げてきたのですが、この間一度も虐殺

の話を知りません。

虐殺の話を知ったのは、例の極東軍事裁判で問題にされたからです。あれは戦勝者のでつち上げです。私は全く信じておりません」

——そのほかに何か当時を知る参考になることがありましたら……。

「それにはこれを見て下さい。私が南京支局に勤務している時、南京陥落二周年がめぐってきました。本社では記念特輯を企画しました。福日南京支局では中国人夫妻をボーイとして雇っておりました。二人は戦争中も南京にいて、当時のことを詳しく知っていました。私は匿名の条件でいろいろ聞きただして記事にしました。その記事は福日紙の昭和十四年十二月十日付第七面に載りました。難民区の有様がよくわかると思っていますので、読んでみます。見出しは、

『難民に当時を聴く、

恐怖の拉夫、拉婦、

目に余る中央軍の暴虐』

で、男の名前は黄真民（仮名。二七歳）で、南京より南方十里ほど距てた郷土の出身で、中学卒業の学歴があり、女は陳美君（仮名。二六歳）で母は蘇州人です。

記者 日本軍がやって来た時君達は何処で如何していたか。

黄 私達夫妻は国際委員会で設定された南京城内西北の山西路からズツと入った頤和路

の難民区にいました。難民区には三十万人の難民が混雑していました。中央軍の兵士が銃槍を持って夜となく昼となく交る交るやって来て難民を檢察し、食糧や物品を強奪し、お金と見れば一銭でも二銭でも捲上げて行きました。最も恐がられたのは拉夫、拉婦で独身の男は労役に使うため盛んに拉致されていき、夜は姑娘が拉致されていきました。中央軍の横暴は全く眼に余るものがありました。

記者 日本軍がやって来たことはどうして知ったか。

黄 戦争が非常に重要時期にあり危険を感じて難民区に入ってから屋外には一步も出ませんでした。たしか十二月十一日だったと思います。家の中で友達と話していると、後の方でパンーパンーと銃声が聞えました。はてな？ 可笑しい銃声だと思わず朋友と顔を見合わせました。

記者 日本軍を見たか。

黄 日本軍を見たのは十二月十八日でした。日本の憲兵が巡察に来たのを始めて見ました。

記者 難民区の中には支那兵は居なかったのか。

黄 居りました。それは皆発見されて捕えられていきました。

記者 君は支那兵と間違えられる様なことはなかったか。

黄 手や頭など調べられましたが肌の色が兵士とはちがうし、又私には妻があったので、中国兵でないと云うことがすぐ諒解されました。

記者 すると陳美君は君の生命の恩人だね、喧嘩せぬ様に仲よくしなければいかんよ。

陳 調べられる時は本当にどうなる事かと恐うございました。

記者 難民区で君達の食物はあったのか。

黄 難民区が設定されると同時に私はデパートの方を退職し、米二石、油塩その他の食糧品を買込んで妻と二人難民区に避難したのです。最初、難民区には前の居住者は逃げたままて人は全く居なかったのですが、後には一ばいに埋ってしまいました。この事務室位の部屋に十二人も一緒に寝ました。

記者 君の郷里は南京からそう遠くはないじやないか、何故郷里へ避難しなかったのか。

黄 それは途中に土匪が多いからです。中央軍も沢山います。

記者 中央軍が居た方が土匪が来なくて都合がよくはないか。

黄 いいえ中央軍も土匪と同じです。金や品物を持って居れば、殺したり、強奪したりするのです。

陳 それで一番安全な難民区へ早くから入ったのです。

記者 君達は殺されたり、強奪されたりする程金銭や品物を持っていたのか。

黄 私達は勤めている時分一家を構えていたので家財道具が沢山ありました。それから私は貯蓄していた金を八百元、妻は四百元持っていました。

記者 それで土匪や中央軍が恐かったわけだね。

黄 恐いものもつとあります。

記者 それは何だ？

黄 悪人です。支那には悪人が沢山います。一面識のあった私の朋友が、私に金があることを羨んで、悪人に通じたのです。それでその悪人が私を捉えて懐中の八百元を強奪して逃げました。

記者 それは何時頃のことか。

黄 日本軍人進城の時です。その悪い朋友は今は何処かへ姿を晦まして帰って来ませんが、金を奪った悪人はまだ南京にいて時々顔を合せます。その悪人の被害者は沢山あります。

記者 何故警察に届けぬのだ。

黄 いいえ、それは無駄です。悪人は徒党を組んでいます。私から金を奪った悪人は今は食うものがなくひどく貧乏をしています。

記者 天罰があつたのだネ。陳の四百元もその時一緒に奪われたのか。

陳 私は蒲団の中にシツカリ縫い込んでいたので見付け出されませんでした。

記者 城内で戦争の激しかったのは何処だったか。

黄 水西門、光華門、下関、挹江門だったと聞いています。日本軍の攻城は周囲から南京を包囲し、攻城法が好かつたので南京は早く陥落しました。何でも水西門付近では十一人の日本兵のため三千人も支那軍が捕虜になつたそうです。

記者 それは珍聞だ。何故抵抗しなかつたのか。

黄 戦意を失つて、皆武器を捨てたのだそうです。

記者 実は僕も南京攻城戦の時従軍記者としてこの南京へやつて来ていたんだ。水西門外には五百も六百もの遺棄死体が散乱していた。その後僕が泊つた所に中華路の宝慶銀楼と云う建物があつた。今度南京に来て如何なつてゐるかすぐ見に行つたが、あれは以前の通り残つてゐる支那人が住んでいたよ。

黄 そうでしたか、少しも知りませんでした。

記者 中華門攻略の際には僕の新聞社の従軍記者が一人戦死したよ。

黄 へえ……、従軍は自分で志願するのですか。

記者 新聞社が派遣するのだ。私のほかに南京に七、八名来ていた。

こういう内容です」

三哲氏は南京支局長時代、家族づれで南京に赴任していた。お嬢さんが一人おり、一年生から五年生まで南京の日本人小学校に通つていた。お嬢さんはこのインタビューの間、同席していらしたので、南京大虐殺の話を持ち出すと、

「そんな話は全然聞いたことがありません。あちらでは近所の支那人の子供たちともよく遊びましたが、彼らからもそのような噂すら聞きませんでした」

ということであつた。

三哲氏は、戦後、西日本新聞の事業局長などを務め、現在は、お嬢さん一家と福岡郊外の大刀洗に住んでいる。八十三歳であるが、十歳以上は若く見え、健康だけでなく、頭腦

も明晰で、当時のことを詳しく覚えておられ、このように話して下さい。

都新聞・小池秋羊記者の証言

小池秋羊氏から話をうかがったのは昭和六十一年の松がとれる前であった。小池氏は前年秋、急性心臓疾患のため倒れ、救急車で病院に運ばれた。退院したのは大晦日であった。私は委細がわからず、家族の方の話では、年が明ければ大丈夫でしょうとの話だったので、気軽にインタビュアーを申込んだ。訪れると、小池氏はまだインタビュアーに答えることのできる状態ではなかった。

それでもインタビュアーに応じてくれたのは、かつて自分が記者だったことと、長年、病身だったための人恋しさかもしれない。

小池氏は以前から一日おきに腎臓の透析のため病院に通っていたので、透析の日以外でしたら、と了解してくれたのである。

この話は、そのような状況で話して下さいたものである。

小池氏は明治四十年生れ。昭和三年、都新聞(現在の東京新聞)に入社し、昭和十三年、社会部次長の時、塚本政治部次長、吉野カメラマンと共に上海・南京戦に従軍した。

都新聞は東京の地方新聞である。上海戦線のニュースは同盟通信から配信を受けていた。そこで小池氏たちは紙面に都新聞のカラーを出す記事を書くために派遣された。

—南京に向うのはいつですか。

「太湖から戻ってきたのが十二月二日か三日です。その頃、馬淵(逸雄中佐)さんが陸軍報道部の窓口をやつてまして、そこに行くと、十三、四人の代議士の慰問団が来ており、南京の陥落が近いので、南京にも行くという話をしていました。その中には日本無産党の加藤勘十(十数日後に人民戦線グループ事件で検挙される。戦後、労働大臣)などいました。そこで一緒に行かないかという話になり、われわれ三人も行くことになりました。

上海を出発したのは十二月の五日か六日頃だったと思います。軍のトラックで、蘇州、無錫、常州を通って南京に向いました。

十二月九日頃だったと思いますが、馬群鎮の近くにあって第十六師団司令部に着きました。師団司令部ですから戦線の後方ですが、紫金山の方からは中国軍が大砲をどんどん撃つてきました。このあたりは山もなく、紫金山にいる中国軍からはよく見えるところですから、危険なのも当然です。記念撮影をしようとすると、大砲の音が凄く、驚いた慰問団は一時間ほどで帰ってしまいました。慰問団とちがってわれわれは帰れませんから、そのまま第十六師団の司令部にすることにしました。

第十六師団の師団長は中島今朝吾中将で、貫通銃創をうけたといつて歩けませんでしたが、それでも陣頭指揮をしていました。中島師団長にはじめてお会いしたのですが、その時は、やさしいお爺さんといった印象を受けました。

馬群鎮の近くには、南京城に入るまで、三日か四日いましたが、その間、降伏勧告の伝單がまかれたり、また、近くでは日本軍の気球が上げられ、攻城砲の射程を測ったりしていました。ここから下関などを攻撃していたようです。南京には二十五万から三十万の中国軍がいたが、この頃五万を残して下関から退いた、と言われています。

第十六師団司令部から数キロ戻ったところに湯水鎮という温泉があったので、何度かそこまで行って温泉にも入りました」

——南京城に入るのは何日ですか。

「十三日か十四日かはつきりませんが、たぶん、十三日だったと思います。師団司令部が南京に入るといので、われわれも中山門から入りました。既に第十六師団の歩兵は残敵掃討ということで、中山門方面から南京市街地をしらみつぶしにして進んだあとでした。われわれも中山東路を行きましたが、城内はどの家も空家で、物音ひとつしない死の大都市街でした。犬、猫の姿一つ見受けられず、不思議な妖気が漂い、街路は激戦の跡とも見受けられない整然とした街並で、びっくりしてしまいました。二、三百メートルほど行くと、前方から顔面から体にかけて血を浴びた、幽鬼のような男が、フラフラとやってきて、私たちとすれ違っていました。中年の男の、兵隊ではない普通の市民らしかったのですが、私たちはじめ日本側は彼を助けようとする者もなく、またその余裕もありません。何時、敗残の敵が眼前に突然現われるかも知らない未知の街なのです。

ああ、やっぱりここは戦場なのだといった恐怖が襲ってきました。

私たち記者団、すなわち、報知、読売、上海日報、それと都の一行六、七人は、南京城外到着以来、中島師団司令部から糧食の給与を受けておりました。そのなかに師団付の従軍僧という人物が一人参加しており、彼が師団との連絡係をやってくれました。

城内を記者団一行は徒歩で観察していましたが、その時、中山路と中正路と交叉する中央ロータリーから少し離れた中正路の奥の方から火事が起こり、誰一人いない空家街は、濛々たる黒煙に包まれ、消火する人もいません。燃えつのが、いつそう凄まじさを拡大していました。そこへ二台の自動車に分乗した外人たちがやってきて、街を縦横に疾駆して、パチパチとカメラのシャッターを切っていました。そして、彼等は一応の取材をする疾風のように現場を去っていきました。

後になって、この一行は、南京における日本軍の暴行、というスクープを打電した「二ユーヨーク・タイムズ」のティルマン・ダーディン記者たちであったらしいことがわかりました。それにしてもこの敵地にも等しい戦場へ、一分のスキも与えず乗り込んできた報道記者の勇敢な行動に、私たちは頭が下がる気持ちでした。

私たちは早速、今夜の宿を決めなければならず、師団司令部にすぐ近い高級住宅街を物色すると、立派な南京政府高官の官邸らしい一軒を見つけ、師団との了解のもとにここを宿舎に決めました。家具や室内装飾もすっかりそのまま、広い応接室から日当りの好いリビング、洋式バス・トイレもついています。水道の栓をひねってみると水も出てきました。一週間以上も城外の激戦場で泥まみれの野宿を続けていた一行は思わず凱歌をあげた

ものです。しかし、まもなく、この蛇口の水は、この家の水道タンクに貯えられていた僅かの水量であることがわかり、がっかりしました。

この家は二階建てで二階は家族の独立した寝室らしく、香水の漂うような華やかな姑娘の個室などは今にも美しい娘が現れそうで、体臭まで残っているような艶めかしさでした。たくさんの書籍が整然と本棚におさまっているこの家の主人らしい書斎もありました。なまなましい住居は私たちも大変気に入りました」

—その時の南京の様子はどうでした？

「その時のことだと思いますが、難民区に行くとき、補助憲兵というのがいて、難民区に潜入している敗残兵を連れだしてました。連れていかれる中国人の親か兄弟かが、兵隊でない、と補助憲兵にすがっているのもしましたが、その光景はまともに見ることができませんでした。それでも補助憲兵は連れていったようですよ」

—何人位の敗残兵を連れていったのですか。

「十人か二十人かまとめて連れていきました。たぶん射殺したと思います」

—どこですか。

「直接見いてませんが、郊外に連れていって射殺したのではないでしょう」

—その他の難民区の様子はどうでした？

「敗残兵捜しの時は難民も動揺していましたが、一般には平静でした。

また、食糧がなく飢饉状態で、食糧をくれ、とわれわれにすがりつく人もいました。私

たちの宿舎には発見された米が何俵もありましたので、難民区のリーダーを宿舎に連れていき、米や副食品などを大八車二台分やりました。難民区には六、七万人いたので、これだけでは九牛の一毛だったと思います」

—難民区の様子など記事にして送っていましたか。

「ええ。私なりに歩いて見た話を書きました。私たちは無電は持っていませんでしたので、上海から来ていた軍の報道部の人に頼んで軍の無電で送りました」

—その後の南京の様子はどうか。

「城内はあちこち行きましたが、私たちは車を持っていかなかったもので、行動半径は限られていました。入城式の時は、私が松井大将の入城する様子を中山門の上からロングで撮り、カメラマンの吉野はプロですから、近くから松井大将のアップを撮りました。この時の写真は一頁で都新聞の紙面を飾っています。また、正月用の写真ということで、一個小隊が紫金山で万歳している写真を撮りました。これはやらせです」

—いつまで南京にいましたか。

「二十四日には上海に帰りたいかったので、軍に話しに行き、二十二日に上海行きの船に乗せてもらうことにしました。船で一泊して、二十三日に上海に着いたと思います。二十四日のイブは上海のフランス租界で祝ってましたから」

—南京では虐殺があったといわれていますが、そういう死体を見えていますか。

「虐殺されたものか、戦死体かわかりませんが、中央ロータリーのそばにつくりかけのビ

ルがあり、この地下に数体の死体がありました。地下に水がたまっていて、この水が血で赤くなっており、青白い死体を見た時はぞっとしました。

それと、挹江門だったと思います。軍のトラックでここに行った時、車に何度も轢かれてせんべいの様になっていた死体が一体ありました。

下関から出発する時は下関にあるドック、それはグラランド・スタンドのような鍋型の造船所ですが、そこに累々たる死体が投げ込まれていたのも目撃しました」

「ドックの死体はどの位ですか。」

「五体や十体じゃなかったと思います。何十体かあったと思います。これは戦死体だと思います」

「そのほかに死体はありませんでしたか。」

「ありませんでした」

「南京で虐殺の話聞いたことはありませんか。」

「ありません」

「噂話といった類のものはどうでした？」

「中国兵が食えなくなつて、自ら捕虜になつたという話は聞きました」

「先ほどの話では、外人記者に会つたということですが……。」

「彼らは一人が一台ずつ車を持って、城内の掃蕩作戦や火事の現場を撮つたり、難民区にも入つて写真を撮つてました。あまり頻繁に撮つているのでびっくりしたほどです。」

私は一度、第十六師団の城内掃蕩作戦で兵隊が掠奪しているのを見ていますし、食べ物
の掠奪は上が黙認していたようなので、これらが記事になつては大変だと思い、このこと
をたぶん、馬淵（逸雄中佐）さんだつたと思いますが、報告に行きました。すると、すぐ
調べると言つて、各城門で外人記者をおさえようとしたらしいのです。しかし、実際、や
ろうとした時には記者がもう上海に帰つたあとでした。それが『シャンハイ・イブニン
グ・ポスト』とか『ノースチャイナ・デイリー・ニューズ』に記事になつて出ました。先
ほど言つたように『ニューヨーク・タイムズ』などの海外の新聞にも出た訳です」

「シャンハイ・イブニング・ポスト」や「ノースチャイナ・デイリー・ニューズ」な
どを小池さん自身ごらんになつたのですか。
「ええ。上海に戻つてから見ました。そういう中立国系の新聞だけでなく、中国の新聞
にも出ていました」

「どういう内容でした？」

「はつきり覚えていませんが、日本軍が南京で掠奪をやつたとかそういうものだったと思
います。」

都新聞は、上海に行った時、ガーデンブリッジのそばにあるアスターハウスを宿舍にし
ていました。ガーデンブリッジを一步越えると、そこはイギリスなどの共同租界で、スタ
ンドには英字新聞や華字新聞が売つてます。われわれは軍の報道部に行つて取材しまし
たが、三人では取材力が限られていましたので、前線に行くより英字新聞から情報を得るこ

とにしています。ですから、大場鎮攻略の頃から、共同租界に行つて、新聞を読むのを日課にしていました。各社も少しはやっていましたが、外国の新聞には都新聞が一番精通していたと思います」

——そういった新聞は反日宣伝の記事も多かったと思いますが、どう判断なさつてましたか。

「もちろん共同租界の方に行けば、日本人は危険ですし、辻には、親日の中国人が日奸といつて殺されて、さらし首にされていました。イギリスも反日ですから、取締りもしないでそのままにしています。私がよく新聞を買いに行ったケリーというイギリスの本屋には反日の本がたくさん売っていました。こういうところですから、中立国の英字新聞といつても、中国寄りの記事で、そのままでは使えません。でも中国側の立場がわかります。私はそれらを頭に入れて記事を書いていました」

戦後、南京では何十万人かの虐殺があつたと言われていますが……。

「私自身が南京で見た死体はさつき言つた通りです。ただ、私は、南京全体を見ていた訳でなく、行動が限られていましたので、ほかのことはわかりません。ですから、私の見えない場所での虐殺があつたと言われれば否定はできません。しかし、日本軍の報告の中にも、千人を殺せば万人と言つたり、ということでしたから、数字はそういうものだと思います。

中国に有利なようにとか、日本に有利なようにという気持は私にはありません。今日話

したことは、南京で自分で見て体験したことだけです」

以上が小池氏の証言である。

小池氏は、昭和十三年二月まで上海にいて東京に戻つたが、この中国行きがきっかけで、それまで抱いていた中国へのあこがれが一挙に燃えあがり、昭和十四年には都新聞をやめ、中国に行くことになった。伝手をたよりに張家口にある蒙疆電業株式会社に入った。しかし、五年勤めたあと、昭和十九年には一兵卒として現地で召集になつてゐる。

だが、この六年間の中国生活で、自分の希望どおり雲岡、竜門の石仏に出会うことができた。

戦後は自分で会社を設立し、実業界に身を置いたが、この間、昭和十四年から終戦までの北支での体験と石仏への想いを『遙かなるモンゴル』『雲岡石仏譚』『竜門曼陀羅』の三冊にあらわしている。

福島民報・箭内正五郎記者の証言

昭和十二年八月、第二次上海事変が勃発し、第三師団、第十一師団が上海に上陸した。

しかし、中国軍の激しい抵抗のため、九月になりさらに第十三師団、第九師団、第百一師団、重藤部隊が派遣されることになった。このうち、第十三師団は予備役を中心に仙台・会津若松・新発田・高田で編成された。このうち、会津若松で編成された連隊が歩兵第六

十五連隊で、連隊長には大佐に進級したばかりの両角業作大佐がなった。

第十三師団は十月上旬に上陸し、老陸宅・馬家宅などで中国軍と戦った。その後、中国軍を追って揚子江沿いを北上し、揚子江最大の要塞・江陰砲台を占領した。江陰占領後、新発田と高田の連隊は揚子江を渡って靖江に向い、仙台と会津若松の連隊がそのまま残り、鎮江に向った。鎮江占領後、今度は仙台の連隊が揚子江を渡り北上し、第六十五連隊だけが揚子江に沿って南京に向うことになった。山田(梅一少将)旅団長が指揮をとっていた。

戦後になり、秦賢助氏が『日本週報』に、「捕虜の血にまみれた白虎部隊」と題する記事を書いた。この中で秦氏は、昭和十二年十二月十五日、白虎部隊は幕府山で捕えた捕虜二万人を虐殺した、と伝えた。

まもなく、福島民友新聞が二年にわたり「郷土部隊戦記」を連載した。当時はまだ南京戦に参加した兵隊が数多く生きており、山田旅団長、両角連隊長も健在であった。この連載は多くの証言・証拠を基にして、秦氏の書いてることは事実とは違うと反証した。さらにその十年後にも鈴木明氏が、『南京大虐殺のまぼろし』の中で、秦氏の証言がフィクションであることを明らかにしている。しかし、一度流布された話はなかなか消えるものでなく、第六十五連隊は、占領後の南京に残った第十六師団と共に南京事件では常に話題になっている。

第六十五連隊には福島民報、福島民友、福島新聞記者が従軍した。これら新聞社は同盟通信を通して配信を受けていたので、従軍記者たちは第六十五連隊付として、連隊の兵

の消息を中心に報道した。

三人の記者のうち、福島民友、福島新聞記者は既に亡くなっており、健在なのは福島民報の箭内正五郎氏一人である。

当時、福島には大小あわせて五紙の新聞があったが、福島民報はこの中で最大の部数を記録していた。昭和十三年には『支那事変郷土部隊写真史』を発行している。これは上海・南京戦における第六十五連隊の戦いぶりを写真でまとめたもので、従軍から戻っていた箭内氏はこの編集にたずさわり、自分で撮った写真も使った。

箭内氏は明治三十七年一月生れ。昭和三年、福島民報に入社し、昭和十二年九月、第六十五連隊の出征と共に上海に従軍した。箭内氏にとっては初めての、しかも唯一の従軍である。郷土部隊と共に派遣された唯一人の記者であるから、福島民報のピカ一の記者であるの言うまでもない。従軍から戻ったあと、昭和十五年には編集局長に就任、昭和二十三年に追放され退社するまで局長をつとめていた。この間、昭和十五年から昭和十九年まで、イタリヤに大使として赴任した堀切善兵衛氏に乞われて秘書として同行した。編集局長の身分のままである。戦後、追放になった時、堀切氏の関係の深い会社に勤めることになった。

話をうかがったのは昭和六十年十二月、福島市内の箭内氏の自宅である。福島市は寒かったが、セーターを着込んだ箭内氏は丸々として、八十一歳であるが元気があった。

——鎮江攻略の後、第十三師団では第六十五連隊だけが南京に向うのですかね？
 「そうです。ほかの連隊は揚子江を渡り北に向いましたので、六十五連隊だけが揚子江に沿って南京に向いました。六十五連隊は上海戦で大きい戦いはほぼ終わりました。その後、大きい戦いは江陰砲台を攻略した時だけです。江陰の戦いは大変でしたが、戦死者からいえば、上海での戦いとは比べものになりません。鎮江に行った時は、既に敵は退却したあとでほとんどいませんでした」

——そのあと南京に向うわけですが、その時、箭内さんは連隊本部と一緒にしたか。

「いつもは連隊本部と一緒にです。私らは連隊付で行ってますから、食事は連隊が残飯を給与してくれますし、記事も連隊が上海の軍報道部まで持って行っていきます。その代り、連隊本部をはなれる時は前もって副官に言っておかないといけません。朝日や同盟の記者は食事も通信も自分でやりますが、その代りどこで取材するのも自由です。そこが違います。」

江陰までは連隊本部にいましたが、あとは平和な戦線でしたので、連隊本部を離れて取材してました。ちょうど鎮江から南京に行く間は輜重部隊のトラックに乗って進みました。後方にいましたから連隊本部にはいませんでした」

——連隊本部と一緒にするのはいつ頃ですか。

「はつきりませんが、十二月十七日から十八日頃です。南京城内の北門から二、三キロ離れたところに連隊本部があり、ここで一緒にになりました」

——十二月十七日の入城式をみますか。

「見てません。ですから私は入城式の終わったあと南京に着いたと思います。第六十五連隊は山田旅団長と両角連隊長、それに一部の兵だけが北門から入って入城式に参加しました。私は南京城内に入ってません」

——十二月十四日頃、第六十五連隊は一万五千人とも二万人ともいわれる捕虜を捕まえますね。

「いま申したように私は後方の輜重部隊にいましたので、捕虜を捕まえた時はいませんでした。捕虜を捕まえたことは連隊本部に着いた時、聞きました」

——捕虜はどうしたのですか。

「かかえていても面倒なので逃がしたのではないでしょうか。その頃捕虜は追い払うしかなかったのですが、逃がしたと言うと、叱られましたから、退却させたとか、殲滅したと言っていたようです」

——捕虜の話は書かなかったのですか。

「書きませんでした。捕虜や戦闘の話よりも兵隊の消息の記事が好評だったので、そういった記事を書きました。捕虜のことは戦前の『支那事変郷土部隊写真真史』が正確だと思います。『支那事変郷土部隊写真真史』は事実どおり書いていますから」

——検閲のため捕虜のことを書かなかったということはありませんか。

「検閲のためということはありません。書かなかったのは捕虜の話をあまり聞かなかった

からです。それほど捕虜の話は話題になってませんでした。

検閲できびしかったのは場所と部隊名で、特に場所は絶対〇〇の二文字でしか書けませんでした。部隊名もやはり〇〇でした。それでも、第六十五連隊がお正月を全椒（南京の北西二十キロ）で迎えたという記事の時は許してくれました。地名が〇〇ではお正月の雰囲気充分に伝わりませんからね」

戦後、福島民友新聞が連載した「郷土部隊戦記」によりすると、この時の捕虜は大多数が逃げ、残った三千人ほどを放そうとした時、暴動が起きて射殺した、と言われてますが……。

「捕虜が暴れたという話を聞いたのは戦後です。南京では捕虜と言ってもあまり話題になりませんでした。戦後になり、虐殺だといわれたので改めて捕虜のことを聞いた次第です」

——秦賢助氏が、白虎部隊は二万人の捕虜を虐殺した、と言ってますが……。

「ああ。秦賢助氏ね。秦賢助氏は第六十五連隊が中国で戦っている時、『白虎部隊』という本を書いて、これが売れて有名になった人です。第六十五連隊には最初私が従軍し昭和十三年の一月末、滁県まで行って福島に戻りました。その後、二月か三月頃、交代で坂本六良記者が行きました。その頃、秦賢助氏は上海にも南京にも行っていないと思いますが、『白虎部隊』という本を書いたものです。

私の兄も当時出征して、第一大隊の機関銃隊の小隊長でした。この前まで元気でしたが先々月八十六歳で亡くなっています。兄は入隊して再役を志願している時の出征だったので現役でした。予備役が多い第六十五連隊では第一線の中心だった訳です。戦後、捕虜をやつたと聞いた時、兄にそのことをたずねたら、『捕虜をやる無駄な弾は持っていない』と言っていました。その頃、補給が充分でなく、本当に戦闘になった時困りますから無駄な弾は使えません。捕虜が暴れてやむをえず使つたということはあっても、捕虜を殺すため射つなんてありません。

考えてごらん下さい。捕虜を捕まえたのは先頭を行った一部の兵隊です。しかも六十五連隊は上海で相当やられて、途中で補充を受けていますが、定員を割ったはずですよ。いたいその時、何人で一万五千人を捕まえたのかわかりませんが、例えば千人で一万五千人を捕まえたとしても一斉に攻められたらたとえ射つても当たらない方が多く、日本人がやられてしまいます。人数から考えてありえないことです。秦賢助氏は南京を知らないでしょうし、当時のことを知ってる人はその話を信用してません。秦賢助氏は福島の人で、福島に住んでいます」

——もう何年前かに亡くなつたと言いますが……。

「そうですね。ずっと会ったことはありませんでした。秦賢助氏の虐殺の話は自分で見たことではなく、たぶん、戦後になって兵隊たちが酒飲み話に話したことを書いたのでしょう。戦争が終ると、兵隊は戦争のことを面白く話しますからね」

——酒飲み話に話すような何かはあつた訳ですか。

「捕虜や便衣隊の話がありました。特に上海ではいろいろありました。上海で、昼お金を

やつて働かせていた捕虜が夜になると謀反を起こし、營舎に手榴弾を投げたり火をつけたりしたことがあります。その時、火事になり私もマントが燃えたことがあります。また、便衣兵が手榴弾を投げたのを見つけて殺しています。ですから市民の服を着て死んでいる者もいました。こういう話が口伝えて伝わったということはあると思います。

またこれもあったことですが、兎や鳥を捕った話が戦後、略奪したことになってます。戦争の話というのは、良い話は伝わらないが、悪い話は何十倍、何百倍になって伝わります。その方が面白いからです。虐殺の話もそんなものでしょう」

——上からの命令ということはありませんか。

「両角連隊長を知っていればそんなことは言えません。両角連隊長は常識のある人で、涙もろく、しっかりした人です。陸大を出てませんが連隊長になり、最後は中将までなってます。立派な人だったので皆は当然陸大を出ていると思っていられないのです。

上海に上陸した時、埠頭で、『兵器はすぐ作ることができると言っていたらしいのです。これまでになるには二十年、三十年とかかっている。身体はそまつにするな。そのため、塹壕は完璧に掘れ』と訓示しました。

上海で六十五連隊は死傷者が一番多かったです。それは連隊長に皆感激しまして、両角連隊長のためなら、と勇敢に戦ったからです。いつてみれば両角連隊長の部下思いがかえって部下を死なせることになったのです。連隊長に反感をもつ部隊は、誰も連隊長のため命を捨てようという気になりませんから、死傷者が少なくなります。経験からこうい

うことが言えます。部下思いの連隊長の兵隊はたくさん死んで、部下を叱る連隊長の兵隊は死なないということです。戦場では人間は単純になるものです。兵隊を助けないなら兵隊に憎まれなくては、と両角連隊長は言っていました。本当です。

私のことでも両角連隊長の思い出があります。私は連隊本部にいて、兄と会うことはなかったのですが、それを知っている連隊長は、お兄さんは元気ですとよく知らせてくれました。あとで聞いたことですが、兄も、弟さんは元気でやっていますと知らせてもらったそうです。

江陰城を攻める時も、上から、何日まで占領せよ、と命令が来たらしいのですが、『何日までとれ、しかしとれなくとも無理をするな、体が大切だ』と訓示しています。ですから、飯に上からそういう命令があったとしても断わります。そういう人です。もちろん自分から命令するはずがありません。

何年前か前、通産事務次官をやった両角（良彦）さんはこの人の長男です」

——六十五連隊で軍紀の乱れとかそういうことが話題になったことはありませんか。
「ありません。今でも福島には当時従軍した兵隊が何十人か何百人かいます。聞けばわかることです。

戦後、南京虐殺があったとか、秦賢助氏が第六十五連隊が大虐殺をしたと言っていますが、誰も信じないでしょう。戦争に行った人は一人殺すのは容易じゃないことを知っています。戦争というのは小さい戦闘でも、大砲の音がどんでんして、銃声が激しく、凄くみえ

ます。でも、後で戦場を見ると、たいてい、これがあの戦場かと思つてしまいます。戦後、この凄いと思つた時の印象の話が広まっているのでしよう。

一部の人がイデオロギーで戦後何度も虐殺だと言つて、その気になる人もいるようですが、南京の様子からは考えられないことです」

——揚子江岸などに死体はありませんでしたか。

「南京では見てません。私が上海、南京で記憶に残っているのは上海です。上海ではよく戦死体を見ました。戦場掃除をしませんから畑の中にもよくありました。それが印象に残っています」

——第六十五連隊は十二月二十日、下関から浦口に渡るわけですが、この時下関に死体は？

「下関の棧橋から海軍の砲艦とか小さい船に乗つて渡りました。棧橋はたくさんあるらしいですが、死体は見ませんでした」

——南京事件は戦後知った訳ですか。

「そうです。戦後、南京で虐殺があつたと聞いてびっくりしました。さつきも言いましたように、上海と比べると南京はあまり激しくない戦線で、福島民友と福島新聞の記者は十二月に帰つてます。私は揚子江を渡り滌具まで行き、一月までいましたが、そういう話は聞いたこともありませんでした。

虐殺はなかつたと思います。戦後、噂話が広まつてなつたものです」

以上が箭内氏の証言である。

第二章

軍人の見た南京

……私は正直言つて、中国びいきです。満州国をつくつたのも賛成じゃない、日支事変も日本がやりすぎたところがあると思つています。しかし、南京の降伏拒否は中国が悪い。しかも、結局最高司令官の唐生智は逃げてますからね。……会社がつぶれる時と同じで、責任者がいなければ会社は混乱して、社員は物を持って逃げますよ。降伏拒否がなければ捕虜の問題も起きなかつたと思います。国際法上、とよく言いますが、国際法上から言えば中国のやり方はまずいと思います。

(松井軍司令官付 岡田尚氏の証言より)



中山北路の安全区付近では水餃子の露店が出ていた。彼は日本兵のお客第一号のようだ(昭和12年12月15日)